



飲酒運転の根絶を目指して

トラック運送業界は、国民の暮らしを守り、産業経済活動を支えるために必要なエッセンシャル事業です。そして、多くのトラックドライバーは使命感をもって日夜輸送を行っています。しかし近年、事業用トラックによる飲酒運転事故件数が増加傾向にあります。トラックドライバーによる飲酒運転は反社会的行為であり、運送業界の社会的信頼性を著しく失墜させるばかりでなく、これまで築き上げてきた荷主企業や社会全体からの信頼関係を

を根底から崩壊させかねない悪質な行為です。

飲酒運転の実態をみると、年齢別では50代が最も多く、次いで60代となっており、運転経過年数別では、5年以下のドライバーに飲酒運転事案が最も多くみられます。繰り返になりますが、事業者の皆様にはドライバーに対して「飲酒運転防止対策マニュアル」などを活用しながら、飲酒運転根絶に向けた指導の徹底をお願いします。

過去4年間にける年齢別・運転経過年数別 飲酒運転事案件数※

●年齢別（単位：件）

年齢	年度	2020年	21年	21年	23年
20代		1	1	0	0
30代		3	1	0	2
40代		11	3	6	5
50代		16	15	10	17
60代		4	6	2	16
計		35	26	18	40

50代が最多！

●運転経過年数別（単位：件）

運転経過年数	年度	2020年	21年	21年	23年
～5年 (1年未満の件数)		11 (4)	7 (4)	7 (4)	14 (6)
6～10年		8	4	2	5
11～15年		5	3	1	6
16～20年		4	2	1	5
21～25年		0	3	3	2
26～30年		4	4	3	3
31～35年		1	3	0	2
36年～		2	0	1	3

5年未満が最多！

※自動車事故報告規則に基づき報告された事業用トラック（軽は含まず）の飲酒事案を国土交通省にて集計。

飲酒運転事例

●点呼前に運転者が飲酒

〈業務前に点呼が実施されなかった事例〉

午前1時頃まで飲酒していたが、早朝からの運行であったため点呼を受けないまま運行を開始し、交差点で信号待ちをしていた乗用車に追突。

〈点呼を実施したが酒気帯び確認が不適切だった事例〉

トンネルの壁面に衝突してそのまま逃走し、その後に国道において酒気帯び運転で現行犯逮捕。電話点呼時にアルコール検知器の作動音を確認しておらず、事故直近の中間点呼はメールで行われていた。

●点呼後の運行中に飲酒

コンビニにおいて缶酎ハイを購入し飲みながら運転し、赤信号で停止した際、すぐにその場で眠り込んでしまい数十分間停止状態に。警察官の職務質問を受け酒気帯び運転が発覚。

飲酒運転防止対策マニュアルは
こちら



出典：公益社団法人 全日本トラック協会「飲酒運転根絶を目指して～トラックドライバーの飲酒の実態と再発防止策～」